

小學校なども生徒の数が少いから大抵は單級である。従つて幼稚園なども置くことが出来ない。そこで晝の間は其農村保全婦の家を幼稚園として、其附近の子供を集め、保全婦が保母となつて世話をする。それから夕方からは小學校を卒業した少女を集めて、裁縫とか割烹とか云ふやうな家事に關係したことを教へる。それから又其處には圖書室もあつて、其村の圖書の管理もする。或は村の婦人達が懇話會でもしやうと云ふことがあれば其世話もし、其家を集會の場所に充てる。又病人があれば出掛けて行つて看護もする。又産婆のことも學んで居るから、出産でもあれば産婆も勤める。

それから又一室には一通りの藥品とか繙帶のやうなものを藏めた戸棚があつて、其處で急病人とか怪我人でもあつた場合には應急の手當もする。さう云ふことで農村生活の不便を出来るだけ減少しやうとして居る。尤も保全婦の出來たのは最近のことであつて、其數はまだ澤山は無かつたが、事業の成績は何れも良く舉つて居つたやうである。それで近頃は保全婦

を養成する特殊の學校が出來て、高等女學校を卒業した女子を入れて一年間講習をする。教へる學科は幼稚園の保母をするのだから教育學があり、衛生とか看護とかあり又家事、裁縫、料理などもある。又農村に居るのだから園藝、養畜、酪農に關することや、其牛乳からバター、チーズを製することや、簡易なる農産製造のことを教へる仕組になつて居る。

兵士の農業講習

又兵士になつた爲に都會に慣れて田舎に歸ることを嫌ふのを防ぐ爲に、兵士に對して農業の講習をやつて居る。日本でも昨年から東京の農業大學で、日曜日毎に兵士中有志の者を學校へ集めて、二時間づつ農業の講習をして居る。獨逸では學校と兵營と同じ處にある所では、大抵兵士に農業講習をさせて居る。

小學校教員の心得

かく農村を嫌て脱走することは、其原因を確めて夫れづの方法で防ぐことが出来るが、最も困るのは勤勞を厭ふ爲めに農村を捨て、都會に出やうとする者である。之に對してはどうしても子供の時から教育殊に小學校からの教育に依つて矯正するより外に手段は無い。小學校令の農業科に就て書いてあるやうに、農業の趣味に長じ勤勉利用の心を養ふことに依つて防ぐが最も良法である。第一に小學校では兒童に成べく無謀の向上心を起させないやうにする。素より人間に向上心が全く無くなれば仕様がなくなるが、無謀の向上心を起させるのは頗る悪い。小學校では生徒をして祖先から傳はつて來た業を續ぎ、財産を失はないやうにし、同時に田園生活の趣味を感じしめ、勤勞を厭はないやうな習慣を付けなくてはならぬ。勿論田園趣味と云ふのは、詩人などの謂ふ所の、單に田園を愛すると云ふ風流心を起させるだけの意味ではない。農業の趣味に長ぜしめて、生産を進める、即ち富を増すと云ふことでなくてはならぬ。であるから小學校に於ては唯田園趣味の鼓吹ばかりではなく、同時に農業の技術に關する知識も

適當に與へて行かなければならぬ。如何に人を農村に留めやうと言つても、農業に利益が無ければ留むることが出来ない。故に農業によりて從來よりも多くの利益を收めることの出来るやうな方法を授けなくてはならぬ。其方法としては一方に於ては勤勞の習慣を養ひ、一方に於ては農業の知識を與へることである。一般に勤勞の習慣を養ひ、農業の趣味に長ぜしむるには、高等小學校の教育が素より必要であるが、尋常小學校に於ても此に注意して兒童を教育しなければならぬのである。

乙種農學校と甲種農學校

それから一面に於ては技藝の教育、言換へれば實業教育を盛にして、之に依つても農村脱走を防がなければならぬ。今日我國の農業教育の機關としては、程度の高いのも低いのも種々あるが、普通地方に在る所の者は、甲乙兩種の農學校及補習學校等である。甲種農學校の方は、入學の程度も修業の年限も一定して居つて、卒業の上は種々な特典も與へられる。例へば一年

志願兵になることが出来る、或は普通文官に任用されるやうな特典がある。従つて文部省に於ても規則を嚴重にして斯くくの設備をせよ、是れくの教員を置けと云ふやうに入ヶ間しく言つて、一定の教育を施すやうになつて居る。

之に反して乙種農學校の方は、入學の程度は尋常小學卒業以上と云ふだけで、修業の年限も、學校の設備も、教員の資格も餘り入ヶ間しくない。だから乙種の方は甲種より程度を高くすることも出来れば、低くすることも出来るのである。所が從來多くの人は乙種農學校は必ず甲種農學校よりは程度の低い者の如く思ふて居る。尤も今日實際設けられてゐる者は、甲種よりは低度の者ばかりである。これに就て私なども時々地方の人から相談を受けることがある。それは自分の地方に斯う云ふ學校があるが、其學校の組織を變へて見たいと云ふ相談である。而してそれは殆ど悉く甲種を乙種にしやうと云ふのではなくして、乙種を甲種にしやうと云ふのである。それに對して私は多くの場合は賛成せぬ。と云ふものは甲種はどう云ふ

人間を養成するを目的とするかと云へば、農業者の中でも中流以上の者を教育するのである。即ち其人の家には雇人なども澤山あつて、自ら鋤鍬を手にすると云ふよりも、寧ろそれらの雇人を指揮して農業を営まうと云ふ中農以上の子弟を教育する、所謂田舎の紳士を養成することを目的として居るのである。それから乙種農學校は自分が實地に鋤鍬を持って一生懸命に働かうと云ふ者を養成するを目的として居るのである。然るに多くの地方の状態を見るに、入學すべき者の家の資産などは調べずして、唯學校の程度を高めやうとし、又生徒の方も自分の家の状況などは構はずに、官吏になれる、一年志願兵になれると云ふやうなことから、甲種の學校に行かうとする風がある。是は餘程考なければならぬことである。地方で農學校を立てやうと云ふ場合には、能く其地方の状態を察し、大農の多い地方であるならば、無論程度の高い完全なる設備の甲種農學校を立つるのが宜いが、中農以下殊に小農の多い地方であるならば、程度の低い學校を設け、多くの子弟を收容して、簡易の教育を施すことが必要である。さうして中農以上

の子弟を教育する甲種農學校は一縣に一つもあれば充分であらう。

高等小學校と乙種農學校とは異なるものである

それから又近來高等小學校の農業科の時間が多くなつて、乙種農學校とは餘り變らぬやうであるから、どちらか一方は要らないものである、廢したる宜からうと言ふ人がある。けれども是は誤で乙種農學校と小學校とは各、趣きが異つて居るのである。小學校の方は言ふまでもなく國民教育であり、農學校は實業教育を目的として居るのである。尤も今日の高等小學は、實業科の時間などを多くし、國民教育とも付かず實業教育とも言へず、少しく曖昧なものであるが、是は將來に於ては義務教育となつて、純然たる國民教育を施す所になるであらうと思ふ。

今日の義務教育の六箇年と云ふのは歐羅巴各國に比しては短いのであるから、早晚八箇年に延長されることにならうと考へる。其場合に於ては現

今の高等小學校をそれに充つれば最も便利であるから、將來のことを考へれば高等小學校を廢することは出來ぬ。一旦廢したものを更に興すことは極めて困難であるから、是は存立して置く必要がある。さうして愈、義務教育が八箇年になれば、農業科の如きものは前の通り二時間位に減ずるであらうから、形式の上からも内容の方からも乙種農學校とは全く異つたものになる。だから今日は二者が稍、似ては居るが、何れも廢すべきものではないからうと思ふ。

農村女子にも農業教育が必要である

以上云ふたことは主に男子に關することであるが、女子に於ても農村脱走と云ふことはあり得る。女子が田舎を逃出して都會に出たならば、男のみ如何に農村に引留めやうとしても引留められ様が無いから、女子に對しても農村脱走を止めさせるやうな方法を講じなくてはならぬ。女子の仕事に就て考へるに、是まで日本の女子は如何なることをして居つたかと云へ

ば、今より三四十年前までは女子は男子の田畑に出て働くのを援けぬではなかつたが、主として着物を作ることが役目であつた。農家の衣服を作るには自分の畑に草棉を作り、それを摘んで来て紡いで絲にし、染めるのは人に頼むこともあるが、自分ですることもある。それから織つて、裁つて、縫つて着物にする。かくの如く一家の着物は悉く婦人の手に成つたのである。是は歐羅巴などでも事情は同じで、英語のウーマン(女)と云ふ語は、ウエーブマン即ち織る人と云ふ意義から出たのである。かく婦人と着物とは關係があるのである。

所が近來は綿は外國から輸入して、紡績業が發達した爲に絲にすることは全部工場でやる。又織るのも大部分機業家が織るので、農家の女子の仕事は其織物を買つて着物に仕立てるだけである。更に甚しきは仕立てたものを買つて着ることもある。例へばシャツ、股引などは工業者の拵へたものを買つて着て居る。さう云ふ次第では、まだ女子が主としてやつて居つた仕事は皆工業者の手に移つたから、農家の女子には殆ど仕事が無くなつ

た。仕事が無くなつたからと云つて何もせず遊んで居れば樂であるが、着物を買ふのには金が要る。仕事が無くなつた代りに金が餘計要るやうになつたから、農家の女子も一方に於てそれだけの稼ぎをすることが必要である。と言つて女子には男子の如き労働は出来ないから、他の仕事を見付けなければならぬ。

今日農家の女子の仕事として、相當の利益を收め得らるゝものは養蠶、養鶏、それから所に依つては養蜂、農産製造と云ふやうなことである。所でかう云ふ仕事をするに就ても、相當の知識が要るので、女子に對しても農業教育を施さねばならぬ。小學校令に於ては女子に對しても農業科を課し得ることになつて居るから、高等小學校に於ても女子をして農業の趣味を長ぜしむるやうにしなければならぬ。

米價騰貴は如何にして救濟するか

それから今一つ近頃の米價問題に關係して、女子の教育に注意しなければ

ならぬことがある。と云ふものは米價が段々高くなる。其高くなるのは種々な原因がある。例へば日本銀行が紙幣を澤山に出すことである。日本銀行創立當時には、壹億五千萬圓位の通貨であつたが、近頃では五億何千萬圓と云ふ額に増加した爲めにも、一般に物價が高くなつた。米價騰貴の原因も一はそこにあるのであるが、今一つは一般の國民が他のものを食べないで、米を餘計に食べるやうになつたことである。現に九州の如きは米の産地でありながら、以前は農家は殆ど米は食はないで、麥や粟や甘藷を常食として居つた。米は病氣にでも罹つた時に養生に食ふ位にして居つたのである。

然るに近來是等の地方に於ても盛に米を食ふやうになつた。而も段々賤澤になつて、南京米や陸稻は不味いと言つて、上等の米を食ふやうになつたから、米の需要が著しく増して米價騰貴と云ふことになつたのである。所でそれならどしどし外國から輸入したら宜からうと云ふ説もあるが、それは先程も云ふ通り世界に於て麥は澤山に産出するが、米の産額は少ない

から、日本で需要が多いとなると、外國に於ても従つて米價が高くなつてやはり不便である。現に本年なども米價を安くする目的で關稅を引下げたが、外國の米價も高くなつて居るので、少しも效力は無かつた。要するに米價騰貴と云ふことは、需要の割合に産額が少いからである。故に米價騰貴を防ぐのには、未墾の地を開墾して、灌漑の便の無い處にはポンプでも使用して、稻を作ることにならなければならぬ。これは多少時日を要する事柄で、直に出来ることでない。そこでもつと手近なことは昔に歸へることである。それはどうするかと云へば、米以外の他のものも食べる習慣を作ることである。

世界の人は何を食ふか

何處の國も人間の食べる食物は大概同じであるが、主として食するものは種々になつて居る。例へば英吉利人は多く小麥の麵包を食べるが、蘇格蘭人は小麥よりも寧ろ燕麥を多く食べる。燕麥の麵包とまでは行かないで、

燕麥粉を湯で掻混ぜてそれを食べる。獨逸人はライ麥で製した黒い色をした麵包を食べる。亞米利加では玉黍蜀を常食にして居る處がある。さう云ふやうに色々なものを食べて居る。而已ならず西洋人は主に麥を食べるけれども、馬鈴薯を作るやうになつてからは馬鈴薯を澤山に食べる。馬鈴薯は元來歐羅巴にあつたものではなく、原産地は南米である。それを歐羅巴に移して盛に作るやうになつたのである。歐羅巴でも所に依ると麥の凶作の時には餓死する者があつたが、馬鈴薯が出来るやうになつてからは、どんな早魃にも不作が無いので食物に缺乏することがなく、爲めに人口が殖えて來たと云ふことである。

西洋人は麵包を常食として居るが、麵包が食べられない場合には馬鈴薯でも何でも食べる。腹が膨れさへすれば何でも宜いと云ふ習慣である。然るに日本人は汁粉を食はうが何を食はうが、後に一杯は必ず米の飯を食べなければ食事をした氣持がしないと云ふ風である。だから米の需要は益増すばかりである。そこで是からはどうしても米以外のものので食事を濟

す習慣を付けなければいかぬ。左ればと言つて味の悪いものを強て食せよと云ふのではない。一體食物は料理の方法に依つて美味にもなれば不味にもなる。而して食物の料理は女子の役目であるから、此點については充分に女子を教育して、米以外のものを巧く料理して常食とするやうに進めて行くことが必要である。

食物費は生計費の幾割を占むるか

食物問題は現今でも八ヶ間しい問題になつて居るが、此後は益、八ヶ間しくなつて來るに違ひない。人間が生活をして行く上に於て食物の必要なことは云ふまでもないが、一體吾々は食物の爲にはどれ位の金を投じて居るかと云ふに、米國マサチューセツト州の調査では、大體斯様である。

収入と支出目との比例

富者	五〇・〇%	中産者	五五・〇%	勞働者	六二・〇%
食物					

(十一) 農村保全と農業教育

五九七

衣	一八〇	一八〇	一六〇
服	一八〇	一八〇	一六〇
家	一二〇	一二〇	一二〇
屋	一二〇	一二〇	一二〇
採	五〇	五〇	五〇
光	五〇	五〇	五〇
採	五〇	五〇	五〇
煖	五〇	五〇	五〇
教	五五	三五	二〇
育	五五	三五	二〇
等	五五	三五	二〇
法律上の保護	三〇	二〇	一〇
衛	三〇	二〇	一〇
生	三〇	二〇	一〇
樂	三五	二五	一〇
娛	三五	二五	一〇

又獨逸で調べた所に據れば、食物に費す金は一年の収入千五百圓の家では五七%、七百五十圓の家では六一%、三百五十圓の家では六七%、百七十五圓の家では六七%である。此の如く富者でも貧乏人でも食物に費す金が大部分をなして居る。殊に下級の労働者では食物に支出する割合が多いのであるから、食物費が生計費に關係することが大である。儉約をすると言つた所で、食物を減らすことは健康を保つ上に於て出来ないのであるから、成べく金を掛けないで養分を多く攝るやうにしなければならぬ。是は獨

り田舎ばかりではない、都會に於ても必要のことであつて、食物に成べく金を掛けないで養分を澤山得るやうにすることは、一家を治めて行く上に於ても極めて大切なことであるから、此點に關する婦人の教育も決して忽せには出来ぬ。

農村家事學校は如何なるものか

であるから前にも云ふた如く、獨逸では中以下の農家は娘を農村家事學校に入れる。其學校では如何なることを教へるかと思ふに、讀書算術は勿論、裁縫、洗濯、割烹、農業の學科及び實習である。農業の實習は園藝、養鶏、養豚、搾乳、其他バター、腸詰、果物の罐詰などを造ること等である。さうして生徒は皆寄宿舎に入れて教育をする仕組になつて居るのである。

獨逸の農村補習學校と學制

最後に獨逸の補習學校の有様を簡単に云はうと思ふ。獨逸の補習學校は

二種になつて居て、一は商工業者の子弟を教育する爲に都會に設けてあるもので、一は農業者の子弟を教育する爲に農村に設けてあるものである。さうして都會にあるのを都會補習學校、農村にあるのを農村補習學校と名けてある。獨逸と云ふても獨逸は幾つもの聯邦から成立つて居るが、其中の一番大きい、又權力のあるのは普魯西である。普魯西の王がカイザルで即ち獨逸帝國の皇帝である。教育機關などの完備して居るのも普魯西であるから、茲に獨逸と申すのは主に普魯西と云ふ意味に解せられたい。獨逸の義務教育は八箇年であるが、小學校は六箇年のものを立つることも出来れば、八箇年のものを立つることも出来る。小學校の學科は國語、算術、地理、歴史、博物、體操、唱歌、裁縫で、裁縫は勿論女子だけである。日本と異なつて居るのは實業科と手工とが無いことである。けれども粘土細工のやうなことは遊戯の時にやらせて居るから、手工は實際あるも同様である。それから八年の小學校では其外に理科と英語か佛語かの外國語を入れることになつて居る。そして獨逸の小學校は、之を卒業しても中等程度の實業

學校へ行けるだけで、大學に行くことは出来ない。大學に行く者の爲には、別に小學校と并行してギムナジウムと云ふのがある。是は三箇年或は四箇年の豫備校を卒へた者を入れて、九箇年で卒業せしめる。九箇年の終に檢定試験を通過した者は、直ちに大學や専門學校に行けるのである。

補習學校の學則教員生徒

小學校を終つた者は、補習學校に入れるのである。普魯西の補習學校は大抵二年から三年の修業年限になつて居るが、稀には一年間修業のものもある。大抵毎年十一月から翌年の五月まで、即ち冬期だけ開くのである。晝間教授するものもあるが、それは極く僅かで、多くは夜間の教授である。教授時數は一週四時間から五時間で、設立者は大抵町村であつて、小學校に附設してある。其數は西曆千九百九年、即ち今より四年前の調に依れば、普魯西全體で三千四百七十六校、之に要する經費が約五十二萬麻、即ち日本の金で約二十六萬圓で、此外に國庫補助が三萬麻ある。

其教員はどうかと云へば、農事巡回教師などが兼務して居ることもあるが、大抵は小學校の教員である。其数は全體で四千八百八十三である。獨逸の小學校には農業科と云ふものが無いから、師範學校にも農業科はない。夫れで小學校の教員が補習學校を受持つ時に農業のことを知らないので大變困つて、今日の所では農學校に講習科を設けて、其處で五週間小學校教員に講習することになつて居る。近い中に補習學校の教員を養成する爲に、獨立の師範學校を拵へると言つて居るが、今日はまだない。

それから生徒の数は、少いのは一校八人、多い所で二十一人、平均十五人ばかりで、生徒の割合に少ない。こんなに生徒の数が少ないと、日本であれば村會議員とか云ふやうな人が八ヶ間しく言出すが、獨逸では生徒の少ないなどのことは一向平氣で、誰れも何とも言はぬ。生徒の少ないと云ふ譯は次の理由に依る。都會の補習學校は義務教育であるから無論生徒が多いが、農村の方は任意になつて居ると、今一つは通學に不便であるから生徒が少ない。獨逸聯邦の中でもサクセンとかバイエルンとか云ふ國では、

數年前から農村補習學校も義務教育にして、小學校卒業後男子は三個年、女子は二個年必ず補習學校に行かなくてはならぬことになつて居る。又普魯西でも十三州の中二州は既に義務教育にして居るが、其他の州は任意になつて居る。併し早晚普魯西全體の農村補習學校も義務教育になると云ふことである。

補習學校の學科目

それから補習學校ではどう云ふ學科を教へて居るかと云ふに、是は皆州に委せて置いて、中央政府は干渉しないから、全國一樣ではないが、大體全國を通じて見ると、國語、算術、理科、國民科等である。國民科と云ふのは日本には無いものであるが、國民として知つて居なければならぬことを教へるので、經濟大意とか法制の如きもので、或は之を生業科と言つて居る所もある。斯く學科を舉げて見れば、農村補習學校に農業科と云ふものが無いから妙に思はれるが、それは總ての學科を農業的に教へるのであるから、特に農業

科を置く必要が無い爲めである。農村補習學校の模範教案として普魯西政府で拵へたものがある。試に其模範教案の教題を掲げて見れば次のやうである。是は三箇年の補習學校の二年目のもので、二十週に割當てた、其一週づゝの教題である。

- 土地は生業の本
- 土壤の性質
- 土地整理
- 整地の器具
- 排水灌漑
- 施肥
- 播種
- 播種の注意
- 氣象
- 收穫

- 豊年祭
- 收穫物の調製
- 牧畜
- 牛
- 牛の飼養
- 牛の營養
- 牛乳
- 養豚
- 小動物の飼育
- 果樹園
- 概括

此教題は國語にも算術にも理科にも總ての學科に適用して之に關係のあることを教へるのである。だから特に農業科を置くよりも總ての科目が農業的になるから實際の効力は却つて多いのである。尤も補習學校に對

する普魯西政府の方針として、第一年目は一般の人生に關係あることを教へ、第二年に農業に關係あることを教へ、第三年目には一般國民として知らなければならぬこと、例へば公共生活、或は社會國家に對する心得などを教へることになつて居る。即ち此處に掲げたるは二年目の教案なれば、他の學年に比ぶれば農業に關する事柄が特に多いのである。

補習學校の學級編成

それから補習學校に對しては、政府はどう云ふ見解を有つて居るか、と云ふに、普魯西政府では補習學校は實業學校ではなく、生徒が小學校で學んだ知識、技能を職業に應用することに習はしむるが目的であるとして居る。それから編制はどうかと云へば、生徒が二十人以下の時には一學級、二十五人以上の時には二學級、五十人以上の時には三學級に編制する。尤も生徒が四十人の時には國語、算術は二學級にし、其他は單級にする。それから六十人の時には國語や算術は三學級にするが、其他は二學級に編制すること

になつて居る。

教授の材料はどうかと云ふと、單級にした時には教材が四年目に一週するやうになる。又三年の學校で二學級の編制の時には、下の級だけ教材を毎年變へて、上の級は二年間同じ教材を續け、三年目に變へる。學科の配當は、一週六時間教授の時には理科と國民科は各一時間、國語、算術が各二時間、一週四時間の教授の時には各課目を四十分にし、五時間ならば各科目を五十分づつ、同じ割合にする。

補習學校は何故に振はぬか

要するに獨逸の補習學校は餘り振つたものではない。其振はぬ理由は補習學校は實業學校でないから、小學校を延長したもの、やうに父兄が思つて、子弟を補習學校へ遣ふことを好まぬ。それと今一つは夜學であるから、若い者を夜間外出せしむるは宜しくないと、父兄が厭やがることである。それから今一つ大なる原因は補習學校は小學校の教員が兼務して居るの

であるが、多く報酬を出さないから、之に關係することを喜ばない。そこで政府は一年の中四週間は小學校教員は皆補習學校に勤務しなければならぬ義務を負はせて、無理に就職せしむることになつて居る。

小學校教員と大臣の待遇比較

小學校教員の俸給はどれ位かと云ふに、獨逸では都會と田舎で俸給額を異にして居るが、平均して年額千圓位である。之を大臣の俸給に比較して、更に日本の小學校教員とどんな割合になつて居るかと云ふに、日本の大臣の俸給は、獨逸の大臣の俸給の半額より少しく少ない位の割合である。然るに日本の小學校教員の俸給は、尋常科正教員と高等正教員とを平均して年額二百五十圓程であるから、獨逸の教員の四分の一にしか當らない。日本の大臣の俸給は獨逸の大臣の俸給の約半額であるのに對して、日本の小學校教員は彼の四分の一に當るに過ぎぬ。

此割合から言へば日本の小學校教員は獨逸などに比ぶれば待遇が悪いと

言はなければならぬ。

それから又小學校の教員には農業の知識が無い爲に、農業の教授が出来ないと云ふ所から、農事巡回教師を補習學校の教員に兼務させたら宜からうと云ふことで、三年ばかり試したが、其成績は良くなかつた。それは何故かと云ふに、第一旅費などの爲に經費が餘計掛る。又巡回教師の本務の忙がい爲に、教授に時間に合はなかつたり、或は雪でも酷く降つたりすれば遠方の學校へは行けなくなる。それから又巡回教師と小學校の教員との折合が悪い。さう云ふやうな種々の原因から、今では農事巡回教師の方は止めて、小學校教員に講習させて、専らそれにやらせて居る。

補習學校は如何せば振興するか

今日獨逸の補習學校の様子は、大體以上の如き情況になつて居る。之に由て見れば補習學校の振ふと振はないとは、主に教授が適切であるや否やと云ふことに歸着する。教授が適切でなければ如何に獎勵しても生徒を得

ることが出来ない。又教授が適切であり、即ち教員が農業につきて相當の知識を備へて、職務に忠實であり、熱誠であれば、補習學校は自然盛んになる。此事は獨逸ばかりでなく日本に於ても同一であらうと思ふ。

結 論

農業と國富を造り強健なる兵士を出すものであれば、決して之を衰へしめてはならぬ。然るに今日は農村を捨て、都會に走らんとする者が、やゝもすれば生ずるのである。誠に警戒を要する時代となつた。農村脱走を促す原因は種々であるが、其中で根本となる重大なるものは、世人が虚榮にあこがれ、勤勞を厭ひ、安逸を求めんとする爲めである。世人舉つて勤勞を厭ひ安逸を求むるときには、獨り農村脱走を生ずるばかりでなく、生産と消費との權衡を失ひて、國は破産の悲に陥るのである。

熟ら世間の趨勢を見れば、都鄙共に奢侈の風に染まりて、衣食住に華美を競ひ入を計り出を制することを知らず、生涯濟し能はざる負債を起しても平

然たる者さへある。農家の負債は年々増加するのみにて、勸業銀行農工銀行若くは信用組合などによりて、高利負債の償却する便を圖れども其甲斐なきは、恐らくは奢侈によりて後から後からと負債の生ずる爲であらう。かくして農家が疲弊するに至らば、骨折りて農村脱走を喰止めても、何の效もないのである。故に農村の繁榮を期するならば、節儉を旨とし、不相當の生活をせぬやうに心掛けねばならぬ。

勤勉と節儉とは何れの業者を問はず、産を成さしむる所以であつて、安逸と奢侈とは家を傾けるものであるは云ふ迄もない。されば農家は我家の跡を絶たないやうに希ふならば、是非共子弟は農家相當の學校に入れて、稼業をなすに必要である技藝を修むると同時に、勤儉の風を養はしめるに努めねばならぬ。

それから教育者も此意を體して、生徒を訓練せねばならぬ。小學校では主として兒童をして勤勞を厭はず、無謀の向上心を起さしめぬやうに教育せねばならぬ。そして尋常小學校なり高等小學校の教員は、兒童の家の資力

を察して、乙種農學校なり甲種農學校なり若くは中學校なりに、入學を選むにつき適當の助力を與へねばならぬ。家の資力も顧みず、向上心に驅らるる少年に同意して、中學校が善からう、大學まで行けと、輕卒に云ふやうなことはないやうに希望する。

乙種なり甲種なりの農學校では、生徒に農業の技藝を授けると同時に、勤儉の氣風を養成するに努めねばならぬ。學問が出来ても、農村を見捨てるやうな生徒を出すことのないやうに、常に訓練に注意せねばならぬ。又女子の教育につきては、遺憾ながら今日は農村の女子を教育に適切な學校が少ない。故にこれからは都會の學校などに行かないやうに、農家に適切なものを農村に設けるやうにせねばならぬ。農村脱走を防ぐ爲めには、女子の教育も決して等閑に付すべきものでない。

要するに今は國家多事の秋でありて、我國をして宇内に活躍させるには、先づ國力を充實せねばならぬ。そして國力の充實には現在にては農業を措て他に求むるものがない。されば國家を思ふものは、農村脱走を防止して農業の振興を圖らねばならぬことは、説明を要せずして明であらう。(大正元年八月高松教育會に於て講演)

(十二) 農業教授に要する器具及標本

(農藝化學教授に共通なるものは之を省く)

レンズ

剃刀

解剖用具

捕蟲網

採集箱
毒壺
展翅板
飼蟲箱
採集胴籠
土壤篩
檢土杖
淘汰分析器
比重瓶
乾濕計
定溫器
水耕試驗器
發芽試驗器

鋤 犁 鋤
レッキ
ホーク
馬耙
雁爪
田打車
鎌
稻扱
麥扱
連耨
篩

万石筥
箕
颯扇
畚
蓆
箕
押切
樹
尺
間繩
如露
擔棒
肥料桶

柄杓
移植鋤
芽接小刀
剪定鋏
噴霧器
蠶
白及杵
蠶架
蠶坐
筵
網
給桑臺
燭臺

桑切臺
 桑切庖刀
 桑入箒
 桑入盆
 羽箒
 箸
 桑篩
 簇製造器
 蜜蜂巢箱
 家禽割勢器
 蜜分離器
 檢卵器
 孵卵器

溫床用框
 フグネル鉢
 土壤標本
 肥料標本
 土壤淘汰分析標本
 家畜模型
 菌標本
 種子標本
 病害作物標本
 微生物プレパラート
 害蟲益蟲標本
 木材標本
 農産物標本

(十三) 農藝化學教授に要する器械藥品及材料

一 器 械

顯微鏡 六百倍以上	一	フラスコ	二
天秤 感量一廳	一	酒精燈	一
ビュレット	一	アルガント燈	一
ピツベット	三	磁製蒸發皿	一
驗溫器	一	ビーケル	二
坩堝	一	洗滌瓶	一
同挾	一	漏斗	二
試驗管	一〇	同臺	一
同臺	一	試藥瓶	三〇
液量器	一	レトルト	一

白金線
 湯煎鍋
 三脚
 鐵鋼
 試驗管挾
 砂皿
 三角架
 吹管
 木栓
 グラス棒
 グラス管
 ゴム管

—
 —
 —
 —
 —
 —
 —
 —
 一〇
 二
 一〇
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

二 藥品材料

鍮(丸角)
 蓋グラス
 コルク壓搾器
 物載グラス
 デッキグラス
 乳鉢乳棒
 ベトリ皿
 三角瓶
 比重計
 コバルトグラス
 水浴
 デシケートル

—
 —
 —
 一
 一
 一
 一
 二
 一〇
 一
 一
 一
 一

硫黃
 磷
 沃度
 ソヂウム
 ボタシウム
 鹽酸
 硝酸
 硫酸
 磷酸
 醋酸
 酒石酸
 過酸化水素
 苛性曹達

中
 中
 中
 中
 中
 中
 多
 多
 多
 多
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 多
 多
 多

苛性加里
 アンモニヤ
 石灰
 苦土
 二酸化滿俺
 酸化水銀
 食鹽
 鹽化バリウム
 鹽化鐵
 昇汞
 四鹽化白金
 沃化ボタシウム
 硝酸ソヂウム

多
 多
 多
 多
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中
 中

硝酸アンモニウム 中
 硝酸銀 中
 炭酸ソヂウム 中
 炭酸アンモニウム 中
 石灰石 多
 硫酸アンモニウム 中
 硫酸銅 多
 硫酸鐵 中
 鹽酸ボタシウム 中
 モリブデン酸アンモニウム 中
 重クロム酸ボタシウム 中
 過滿俺酸ボタシウム 中
 磷酸ソヂウム 多

中 中 中 中 多 中 多 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

硫青化ボタシウム
 醋酸鉛
 酒石酸ボタシウムソヂウム
 蓆酸アンモニウム
 枸橼酸アンモニウム
 黃血鹽
 赤血鹽
 ネスレル試藥
 ミロン試藥
 フェリング溶液
 澱粉
 糊精
 甘蔗糖

中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

麥芽糖 中
 葡萄糖 中
 酒精 多
 エーテル 多
 ベンゼン 多
 ダイフェニルアミン 中
 サイモル 中
 單仁 中
 グアヤコル 中
 グアヤク樹脂 中
 ペプトン 中
 メチル青 少

中 中 多 多 多 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

フクシン
 タカデアスターゼ
 リトマス
 蒸溜水
 磷礦
 過磷酸石灰
 骨粉
 石灰窒素
 トーマス磷肥
 沈澱磷酸石灰
 濾紙
 備考
 多は一ポンド
 中は一オンス
 少は十グラム

少 少 中

農業教育及農業教授法附録終

(二三) 農藝化學教授に要する器械藥品及材料

大正元年十一月廿四日印刷
大正元年十一月廿七日發行

農業教育及農業教授法與付

正價金壹圓八拾錢

不許複製



著者檢印

著者 澤村 眞

發行者 辻本 卯藏

印刷者 金崎 金平

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所

東京市神田區北神保町十一番
電話本局三四三二一
振替口座東京八壹五番

弘道館

弘道館出版書目

文部省著作

日本教育史

△上古中古近世に分ちて日本の教育と學校其他の教育等を叙述詳論したる者

◎洋装菊判上製全一冊

◎正價 金壹圓

東京帝國大學心理學教室編纂

實驗心理寫真帖

△實驗心理の關聯は開かれたり、一たび本書を披かば坐して心理實驗の實況を見るべし

◎洋装四六二倍判上製全一冊

◎正價 金壹圓六拾錢

東京高等工業學校教授小林豊造先生外拾壹教授編纂

工人寶典

△法制、經濟、貿易、交通、機關通信、人文地理歴史、發明、機械、電氣、建築、應用化學、染織、漆器、陶器、磁器、金工、製版、諸表、公式等を載す

◎洋装菊判裁判形上製全一冊

◎正價 金壹圓貳拾錢

工學博士 櫻井省三先生 工學博士 寺野精一先生 外拾壹大家編纂

日本近世造船史

△本邦未曾有の造船史▽

◎洋装菊判上製全一冊

◎正價 金壹圓七拾錢

農學博士澤村眞先生著 東京弘道館發行
訂改 農藝化學講義
洋装菊判形上製全一冊
紙數六百餘頁口繪四面
正價 金壹圓八拾錢
送料 金拾五錢

◎今回第四版を發行するに當り全部改版したり内容は左の要目に
て知れ

第一篇 植物營養	第一章 炭水化合物	第二章 脂質	第三章 蛋白質	第四章 有機酸	第五章 窒素化合物	第六章 植物の組成	第七章 植物の生理	第八章 植物の生育	第九章 植物の生殖	第十章 植物の病害	第十一章 植物の採集	第十二章 植物の乾燥	第十三章 植物の保存	第十四章 植物の分析	第十五章 植物の利用
第二篇 土壤	第一章 土壤の生成	第二章 土壤の組成	第三章 土壤の分類	第四章 土壤の物理的性質	第五章 土壤の化學的性質	第六章 土壤の肥力	第七章 土壤の改良	第八章 土壤の調査	第九章 土壤の改良	第十章 土壤の改良	第十一章 土壤の改良	第十二章 土壤の改良	第十三章 土壤の改良	第十四章 土壤の改良	第十五章 土壤の改良
第三篇 肥料	第一章 肥料の分類	第二章 肥料の性質	第三章 肥料の施用	第四章 肥料の調査	第五章 肥料の改良	第六章 肥料の改良	第七章 肥料の改良	第八章 肥料の改良	第九章 肥料の改良	第十章 肥料の改良	第十一章 肥料の改良	第十二章 肥料の改良	第十三章 肥料の改良	第十四章 肥料の改良	第十五章 肥料の改良
第四篇 飼料	第一章 飼料の分類	第二章 飼料の性質	第三章 飼料の調査	第四章 飼料の改良	第五章 飼料の改良	第六章 飼料の改良	第七章 飼料の改良	第八章 飼料の改良	第九章 飼料の改良	第十章 飼料の改良	第十一章 飼料の改良	第十二章 飼料の改良	第十三章 飼料の改良	第十四章 飼料の改良	第十五章 飼料の改良
第五篇 飼料の加工	第一章 飼料の加工	第二章 飼料の加工	第三章 飼料の加工	第四章 飼料の加工	第五章 飼料の加工	第六章 飼料の加工	第七章 飼料の加工	第八章 飼料の加工	第九章 飼料の加工	第十章 飼料の加工	第十一章 飼料の加工	第十二章 飼料の加工	第十三章 飼料の加工	第十四章 飼料の加工	第十五章 飼料の加工
第六篇 飼料の保存	第一章 飼料の保存	第二章 飼料の保存	第三章 飼料の保存	第四章 飼料の保存	第五章 飼料の保存	第六章 飼料の保存	第七章 飼料の保存	第八章 飼料の保存	第九章 飼料の保存	第十章 飼料の保存	第十一章 飼料の保存	第十二章 飼料の保存	第十三章 飼料の保存	第十四章 飼料の保存	第十五章 飼料の保存
第七篇 飼料の分析	第一章 飼料の分析	第二章 飼料の分析	第三章 飼料の分析	第四章 飼料の分析	第五章 飼料の分析	第六章 飼料の分析	第七章 飼料の分析	第八章 飼料の分析	第九章 飼料の分析	第十章 飼料の分析	第十一章 飼料の分析	第十二章 飼料の分析	第十三章 飼料の分析	第十四章 飼料の分析	第十五章 飼料の分析
第八篇 飼料の利用	第一章 飼料の利用	第二章 飼料の利用	第三章 飼料の利用	第四章 飼料の利用	第五章 飼料の利用	第六章 飼料の利用	第七章 飼料の利用	第八章 飼料の利用	第九章 飼料の利用	第十章 飼料の利用	第十一章 飼料の利用	第十二章 飼料の利用	第十三章 飼料の利用	第十四章 飼料の利用	第十五章 飼料の利用
第九篇 飼料の改良	第一章 飼料の改良	第二章 飼料の改良	第三章 飼料の改良	第四章 飼料の改良	第五章 飼料の改良	第六章 飼料の改良	第七章 飼料の改良	第八章 飼料の改良	第九章 飼料の改良	第十章 飼料の改良	第十一章 飼料の改良	第十二章 飼料の改良	第十三章 飼料の改良	第十四章 飼料の改良	第十五章 飼料の改良
第十篇 飼料の改良	第一章 飼料の改良	第二章 飼料の改良	第三章 飼料の改良	第四章 飼料の改良	第五章 飼料の改良	第六章 飼料の改良	第七章 飼料の改良	第八章 飼料の改良	第九章 飼料の改良	第十章 飼料の改良	第十一章 飼料の改良	第十二章 飼料の改良	第十三章 飼料の改良	第十四章 飼料の改良	第十五章 飼料の改良

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 井上哲次郎先生著

倫理と教育

版三

◎洋裝菊判上製
◎紙數六百三十餘頁
◎正價金壹圓五拾錢

東京第一高等學校校長 新渡戸稻造先生著

歸雁の蘆

版八拾

◎洋裝頗る美本函入
◎挿書十數葉挿入
◎正價金壹圓

東京高等師範學校講師 巨理章三郎先生著

少年鑑

版三

◎洋裝菊判頗る美本函入
◎木版寫眞版挿書壹百個
◎正價金壹圓七十錢

盛岡高等農林學校校長 玉利喜造先生著

實用倫理

刊新

◎洋裝菊判上製全一冊
◎紙數四百五十餘頁
◎正價金壹圓五拾錢

▲修身教授の絶好参考書、學生諸君の最良修養書

東京帝國大學 文學博士 福來友吉先生譯

教育心理學講義

版三

◎洋裝菊判全一冊
◎數三百餘頁
◎正價金壹圓

△教育心理活用の唯一指針

文部省視學官兼 榎山榮次先生著

教育教授の新潮

版二十

◎洋裝脊皮上製
◎紙數八百餘頁
◎正價金貳圓

△本書は教育教授の理論并に實際に對する革新の新聲也

東京帝國大學文科大學助教授 文學士 吉田熊次先生著

系統的教育學

版壹拾

◎洋裝菊判上製
◎紙數八百餘頁
◎正價金貳圓

△教育界の明星出現

文學士 北澤定吉先生著

倫理學史綱

附錄
倫理學
年表一冊

◎洋裝菊判上製
◎紙數四百餘頁
◎正價金壹圓卅五錢

△倫理研究者の燈火○文部省檢定受験者の絶好参考書

發行所 東京 神田區 北神保町 弘道館

發行所 東京 神田區 北神保町 弘道館

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 元良勇次郎先生著

心理學綱要

△本書は如何に世の歡迎を受けてあるか賣行の驚へく迅速にて

版三十

◎洋裝菊判全一冊
◎紙數三百卅頁
◎正價金壹圓

東洋大學講師 文學士 紀平正美先生著

最新論理學綱要

△世評論理學書中の泰斗なりと本書は一時速成の著にあらず

版六

◎洋裝菊判全一冊
◎紙數三百餘頁
◎正價金壹圓

東京帝國大學 農科大學教授 理學博士 石川千代松先生著

進化的動物學綱要

△動物研究に志すものは必ず本書より始めよ

刊新

◎洋裝菊判上製
◎插畫木版密書七十餘個
◎正價金壹圓參十錢

文學士 北澤定吉先生著

哲學史綱

版四

◎洋裝菊判上製
◎紙數三百六十餘頁
◎正價金壹圓廿錢

弘道館出版書目

廣島高等師範學校訓導 廣島高等師範學校訓導

綴方教授法精義

本書は心理的なる事、系統的なる事、調和的なる事

版十

◎洋裝菊判全壹冊上製
◎紙數五百頁
◎正價金壹圓五拾錢

奈良縣師範學校教諭 中川壽照先生著

中等農學教科書

理想的の師範學校用農業教科書 文部省檢定濟

◎上中下全三冊
◎正價各冊五十五錢

文部省視學官 農學士 針塚長太郎先生 農科大學教員養成所講師 矢田鶴之助先生 共著

農村補習新讀本

◎前編後編續編
◎全編後編續編
◎紙數各三拾錢

文學博士 井上哲次郎先生 文學博士 元良勇次郎先生 文學博士 中島力造先生 文學博士 三宅雄次郎先生 文學博士 浮田和民先生 文學博士 加藤玄智先生 文學博士 吉田熊次先生 文學士 有馬祐政先生 共著

國民生活と宗教

◎菊判形全一冊
◎正價金六十錢

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 電話本局三四三番

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 電話本局三四三番

弘道館出版書目

理學博士 田中正平先生校 理學士 田邊尙雄先生著
音響と音楽
 △出版界の珍書音響學著述の嚆矢
 ◎洋裝菊判全一冊
 ◎插書木版密書七十個
 ◎正價金八拾錢

陸軍砲工學校教授 理學士 石原 純先生著
美しき光波
 △興味ある理科教授をなさんとするものは必ず讀め
 ◎洋裝菊判上製全二冊
 ◎插書百三十九個
 ◎正價金壹圓五拾錢

文學博士 男爵 加藤弘之先生著
學說乞丐袋
 ◎洋裝菊判形上製全一冊
 ◎正價金壹圓八拾錢

神野淺治郎先生著
兒童理科教授の準備其實際
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金壹圓五拾錢

弘道館出版書目

講演者 理學博士 石川千代松先生
 高等師範後藤牧太先生
 農學博士 橫井清一先生
 理學士 川村清一先生
通俗科學講演會編
 正全菊一冊 價金六拾錢
 洋裝總布全一冊 價金九拾錢
 郵正五 稅金十 錢圓頁冊

東京帝國大學 文科大學教授
國運と信仰
 ▲博士最近數年間の大論文集めたる者
 郵正五 稅金十 錢圓頁冊

文學士 北澤定吉先生著
偉人耶蘇
 ▲著者の倫理教育宗教に關する意見を叙して俗學者俗宗教家教育家の頭上に痛撃を加へしもの
 送正菊 價金全一冊 料金五拾錢
 送正菊 價金全一冊 料金五拾錢

米國ハーバート大學教授
最新哲學 實際主義
 ゼームス博士原著 北澤文學士、吉田文學士、西山哲治合譯
 送正八菊 價金壹圓五拾錢 料金壹圓五拾錢
 送正八菊 價金壹圓五拾錢 料金壹圓五拾錢

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

弘道館出版書目

農學博士 澤村 眞先生著
 農科大學教授 農學博士 澤村 眞先生著

洋裝菊判全一冊
 紙數五百餘頁
 正價金壹圓五拾錢

農學士 針塚長太郎先生 共著
 矢田鶴之助先生

(乙種農學校用教科書)

農業新讀本

上中下全三冊
 各冊定價二十錢

農科大學教授 林學博士 本多靜六先生增訂
 奈良縣立農林學校教諭 林學士 安藤時雄先生著

林學講義

洋裝菊判上製
 紙數約四百頁
 正價金壹圓八拾錢

農學博士 澤村 眞先生著

農藝化學講義

版四

洋裝菊判上製
 紙數四百五十餘頁
 正價金壹圓三拾錢

△極めて實際的に應用的の好著

弘道館出版書目

海軍教育本部海軍中佐 眞田鶴松先生校閱
 弘道館編輯部編纂

片假名信號體操

四六判頗る美
 挿書百餘個
 正價金拾貳錢
 送料

樞密顧問官 子爵 金子堅太郎先生著

日本教育の將來

菊判形全一冊
 正價金貳拾錢

(賜天覽) ▲教育家諸君の一讀を望む▼

東京高等師範學校教授 東京帝國大學文科大學助教授 文學士 保科孝一先生著

言語講話

總布製全一冊
 正價金八拾五錢

(修正參版)

▲言語學の一班を平易懇切に説明せられたるもの▼

文學士 保科孝一先生著

改定假名遣要義

菊判全一冊
 正價金四拾錢

▲改正の理由、性質、及び如何に教授上に應用すべきかは本書により明らか也

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

弘道館出版書目

文學博士芳賀矢一先生監修 東亞協會文藝部編纂
曉 靄 集
 四六判形頗る美本
 紙數四百餘頁
 正價金八拾錢

文學博士井上哲次郎先生文學博士井上圓了先生序 西山愆治編纂
 文學博士元良勇次郎先生 下田歌子女史 (中村不折挿畫)
日本家庭辭書
 洋裝四六判頗る美本
 七百三十餘頁
 正價金壹圓三拾錢
 郵税金拾五錢

▲家庭末代の寶典▼
 東京女子高等師範學校教授 東 基吉先生編纂
新案 育兒日誌
 洋裝四六判全一冊
 上等數四百五十餘頁
 特製脊皮正價金五十錢 並製總クローズ正價金四十錢 送料八錢
 ▲子ある家庭には必備の寶典▼

早稻田大學 文學士 藤井健治郎先生新著
主觀道徳學要旨
 洋裝菊判形上製
 紙數六百五十頁
 正價金壹圓九拾錢
 ▲最も穩健にして最も嶄新なる學說を聽かんと思はば先づ劈頭本書を繙け。
 ▲舊刊陳套の倫理學書に飽きたる者須らく本書を讀め。

司法省參事官法學士 泉二新熊先生校 法典研究會編纂
新刑 法 正解
 附錄 改正陸軍刑法 正文 四六判形三百餘頁
 改正海軍刑法 正文 正價金五拾錢
新監獄法 郵 稅 八 錢
 ▲我邦國民は何人も一讀せざるべからざる法典▼

法學士 笹川潔先生著
日本の將來
 郵 正 菊 判 形 全 一 冊
 價 金 六 拾 一 錢
 稅 金 六 錢
 ▲我政治經濟社會及思想の將來に對する大議論▼
 ▲我日本の將來は如何に成り行くか▼

法學士 笹川潔先生著
大觀 小觀
 郵 正 菊 判 形 全 一 冊
 價 金 四 拾 一 錢
 稅 金 六 錢
 ▲時に國家を提擧し社會を鞭撻し或は人事を觀し或は自然を謳ふ理趣あり、情
 景あり以て修養に資すべく又文章の範とすべし。

學 海 隱 士 著
成功秘訣 受驗術
 正 袖 珍 金 菊 三 拾 錢
 價 金 三 拾 錢
 ▲受驗者の手引草受驗の秘奧を闡明せしは本書也と▼

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 振替口座番 壹壹壹壹壹壹壹壹

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 振替口座番 壹壹壹壹壹壹壹壹

弘道館出版書目

鎌倉建長寺管長釋宗演先生著

筌

蹄

錄

△内容は修養談あり、教育談あり、宗教論あり、實業論あり、而も根柢に透徹せる禪味に至つては吾人の表顯し得べき限にあらず

◎四六判形洋装全一冊

◎正價金八拾錢

米國兒童研究會長

バーカ博士編

教育學博士西山慈治先生譯

兒童教育 歐米教育大家意見

◎四六判形全一冊

◎正價金四拾錢

△小學校の經典として英米の教育界を動かせしは本書也

米國哲學博士 アービングキング博士原著
鹿兒島縣師範學校教諭 池上弘先生譯

機能主義 兒童心理學

◎洋裝菊判上製全一冊

◎正價金六拾錢

盛岡高等農林學校教授文學士 嶋本愛之助先生譯

歐米道德教育の趨勢

◎洋裝菊判上製全一冊

◎紙數約五百頁

(スピーラー教授原著)

◎正價金壹圓五拾錢

弘道館出版書目

盛岡高等農林學校教授 農學士 吉村清尙先生著

最新肥

料

學

版三

△本書は肥料に關する一般的の智識と専門的の智識とを説く事懇切にて斯界の光明坊間見る幾多の翻譯的の書と大に其趣を異にす

◎洋裝菊判上製全一冊

◎紙數二百八十餘頁

◎正價金壹圓貳拾錢

大阪高等工業學校教授 蜂屋貞與先生校
大阪市立工業學校 齊藤正治先生著

礦物工業試驗法

◎洋裝菊判形上製一冊

◎正價金壹圓

△礦物の鑑識並に分折を最も詳細に平易に記述せし者

日本女子大學教授 白井規矩郎先生著

最近女子運動遊戯

◎洋裝菊判全一冊

◎紙數壹千餘頁

◎正價金壹圓五拾錢

嶄新なる女子運動法高等優美の女子遊戯法

東京帝國大學 文學士 小林一郎先生譯
文科大學講師

らんすき氏讀書論

◎菊判形全一冊

◎正價金五拾錢

△内容は社會問題り教育論り處世論り文明論り附録は婦人論を載す

弘道館出版書目

文部省實業學務局 宇野三郎先生 共著
東京高等工業學校助教授 野田市三郎先生 共著

實業 **工業化學教科書**

△文部省制定教授要目準據せる中等程度の工業學校用教科書

文部省普通學務局 福士未之助先生著

普通教育 **禮儀教育論**

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價金七拾五錢

賜天覽

久我侯爵題字 三上博士序 清水孝教編
東久世伯爵 芳賀博士

家庭訓語 **今日の歴史**

△過去數千年間の歴史上の人物出來事を一年三百六十五日に割當先人の遺訓と言行により精神修養の資料となしたる者

文學博士井上哲次郎先生 文學士岩橋遵 成先生 共編
文學博士服部宇之吉先生 文學士豐島要二郎先生 共編

和論 **語纂註**

譯論 **語纂註**

◎洋裝菊判上製全一冊
◎近刊

弘道館出版書目

文學士北澤定吉先生 早稻田大學文學士宮地猛男先生 共編

哲 **學 汎論**

菊判形全一冊
正價金七拾錢

▲▲哲學研究者の好案内也!!
▲▲初學者には好個の參考書也!!

(增訂再版)

東京小兒科病院長 醫學博士 瀨川昌著 先生校
福岡縣立小倉師範學校校長 織田勝馬先生 共著
福岡縣女子技藝學校校長 白土千秋先生 共著
小學 **劣等生救済の原理** 井に **方法**

洋裝菊判全一冊
正價金六拾錢
郵稅金六拾錢

▲我邦低能兒教育主張者の嚆矢

兵庫縣姫路師範學校校長 野口援太郎先生 閱 原田義藏先生 著
事實に **學 校 教育**
基きたる

洋裝菊判上製全一冊
正價金貳圓

東京高等師範學校教授 阿部七五三吉先生 新著

實 **驗 圖 畫 教授法**

洋裝菊判上製全一冊
紙數七百餘頁
正價金貳圓六拾錢

▲著者前後十有餘年苦心研究の一大結晶也

弘道館出版書目

學習院教授 佐野正造先生著

最新 手工教授書

△手工教授の効果を擧げんとする實際教育家は本書に來れ

文學博士 福來友吉先生校閱 浦谷甫水先生著

教育 俚諺心理百話

△世の民族心理の研究に志す者は唯一の指針也

文學博士 井上哲次郎先生主幹 東亞協會編纂

女大學の研究

△幕府の頃女子教育唯一の寶典の女大學を當今女子教育家及倫理界の明星か新しき見識を以て研究せし者

廣島高等師範學校教諭藤井慮逸先生 久芳龍藏先生新國寅彦先生共著

綴り方文例

△綴り方教授改善の曙光は本書を兒童に使用めしせよ

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 井上哲次郎先生著

教育と修養

△教育界の活問題人間所生の活指南車也

東京帝國大學 文學博士 元良勇次郎先生著

論文集

△博士の精透適確なる所説論斷は悉く本書に收む

東洋大學長 文學博士 井上圓了先生著

哲學新案

△嶄新獨創の新案を樹立し宇宙の謎を解き造化の秘を啓き靈魂の幽を究め人生の奧を明かにしたる明快活達の大文字也

京都帝國大學 文學士 朝永三十郎先生著

人格の哲學と超人格の哲學

△我邦刻下の急切問題たる個人主義對國體主義の輸贏若しくは調和問題に對する公平なる批判を試みたり

弘道館出版書目

帝國大學文科大學助教授 文學博士 吉田熊次先生著

教育的倫理學

△本書は訓練論と共に唇齒輔車の如く始めて教壇上の完璧を期せられたるもの悉く實際教育上の金科玉條

文學博士 吉田熊次先生著

訓練論

△本書は時代の渴望に投せられたる新來の思潮也

東京高等師範學校訓導 岡千賀衛先生著

自學新教授法

△小學校教授法の根本的大刷新◎發表主義教授法の嚆矢

文學博士 原秀四郎先生著

新編國民地圖

著者が十餘年來心血を瀝つて研究されたる日本歴史地理と之に地誌地圖とを加へて日本帝國の發達を地圖上より觀察し、嶋國的元氣の保持と海洋主義を鼓吹し同時に一般地理歴史研究の參照用に提供せられたり

早稻田大學講師 文學士 高桑駒吉先生著

日本通史

△論斷確的、記事公明行文流麗にして難澁の跡なく加ふるに多數の歴史地圖を挿入す、史界近來の好著也

東京帝國大學 文學博士 加藤玄智先生著

釋伽牟尼佛

△一冊子に過ぎざるも佛教本來の面目を顯示し得て遺憾なし

文學博士 遠藤隆吉先生著

東洋倫理學

東洋倫理學の建設者と稱する博士の新著也

文學博士 井上哲次郎先生主幹 東亞協會編纂

倫理研究

△現代斯界の明星十餘名に乞ふて諸先生の蘊蓄と深き研究により成れり

洋裝菊判上製一冊 紙數四百餘頁 正價金一圓二十錢

洋裝菊判全一冊 紙數三百餘頁 正價金壹圓

菊判形全一冊 正價金卅錢

洋裝菊判全一冊 紙數壹千三百五十頁 正價金參圓八拾錢

洋裝菊判上製一冊 正價金壹圓

洋裝菊判上製全一冊 紙數四百五十餘頁 正價金壹圓五十錢

洋裝菊判上製全一冊 紙數四百五十餘頁 正價金一圓五十錢

洋裝菊判上製全一冊 紙數三百餘頁 正價金壹圓三拾錢

弘道館出版書目

弘道館出版書目

白井悦子 女史 著

西洋料理貳百種

△何人も容易に低廉の材料で風味佳良なる洋食を立どころに調理せられる

◎四六判形全一冊
◎正價金三拾五錢

伊藤 銀月 著

予の半面

◎菊判形全一冊
◎正價金五拾錢

東京女子高等師範教授

文學士 尾上柴舟著 挿書中澤弘光、山本森之介、岡野榮氏

永日

△歌を愛し歌を知らんとするもの本書を得て始めて理想的の絶好資料を獲得す

◎四六判形上製全一冊
◎正價金八拾錢

學習院教授文學士 藤澤周次先生譯述

新婦人

スウデルマンの最傑作とする本書は實に近世的問題劇で新舊思想の衝突を描いたものである。

◎洋裝四六判上製一冊
◎正價金八拾錢

弘道館出版書目

帝國教育會編纂 ●谷干城君、井上博士、三上博士、三宅博士、大槻博士其他の講述

六先哲

○山鹿素行 ○山崎暗齋 ○中江藤樹 ○伊藤仁齋 ○新井白石 ○青木昆陽の六先哲贈位祝典大會紀念出版也

◎菊判形全一冊
◎正價金五拾錢

帝國教育會編纂 乃木大將、小松原文相、井上博士、嘉納校長、三島博士等講述を知らす

吉田松蔭

○教育上の好資料たらしめんため最も正確に最も興味ある著書として公にせり本書は五十年紀念大祭の紀念出版

◎菊判全二冊
◎正價金六十錢

熊本高等工業學校教授高橋正熊先生著

現代生活の危機及救濟

◎菊判形全一冊
◎正價金六拾錢

△新成切論 || 新教育論 ||

竹越三又君 戸水博士序 山田毅一君著

南洋行脚誌

◎菊判形全一冊
◎正價金六拾錢

△苟も意氣潑刺なる男兒は此快書を一讀せざるへからず

弘道館出版書目

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編 (尋常小學一二年)
新定 尋常小學修身教授書 全二册
◎總布製菊判各册
◎正價金六十五錢

學習院教授 佐野正造先生 東京高等師範學校訓導 岡千賀衛共先生編
新定 尋常小學算術教授書 全六册
◎總布製菊判各册
◎正價金五十五錢

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編
新定 尋常小學歷史教授書 一册
◎總布製五年用全一册
◎正價金六十五錢

東京高等師範學校訓導 肥後盛熊先生共編
新定 毛筆畫教授書 全二册
◎總布製菊判各册
◎定價金七拾錢

東京高等師範學校訓導 肥後盛熊先生編
新定 鉛筆畫教授書 全一册
◎總布製菊判各册
◎定價金七十錢

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編
新定 高等小學歷史教授書 一册
◎菊判形 總布製
◎正價金六十五錢

弘道館出版書目

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著
明治國民讀本 全二册
◎菊判形 全三册
◎上中下正價各册廿五錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著
高等 明治公民讀本 全一册
◎菊判形 全一册
◎正價金二十五錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著
最新 實業算術書 全二册
◎菊判形 全二册
◎正價金廿五錢

茨城縣大湊商業學校長 稻葉鶴次先生著 (文部省檢定濟)
小學商業教科書 全三册
◎菊判形 全三册
◎上卷十五錢 中下各廿五錢宛

文學士 保科孝一校閱 文部省實業學務局 宇野三郎 永好信八 佐々木信一共編
小學國語辭典
◎洋裝二六判形上製全一册
◎正價金

廣島高等師範學校教諭 藤井慮逸 久芳龍藏 新國寅彦先生共編
新定 尋常小學讀本教授書 全十二册
◎菊判形 各册
◎定價六十五錢宛

弘道館出版書目

文學博士 遠藤隆吉先生著
教育國家的建設
 ◎◎菊判形全一冊
 正價金二十五錢

文學博士 遠藤隆吉先生著
社會學稿本
 ◎◎菊判形全一冊
 正價金二十錢

文學博士 遠藤隆吉先生著
軟教育と硬教育
 ◎◎菊判形全一冊
 正價金三十錢

法學博士 有賀長雄先生述
歷史に於ける社會政策
 ◎◎菊判形全一冊
 正價金三十錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生著
商業算術書
 ◎◎洋裝菊判全一冊
 正價金六十錢

文部省實業學務局 宇野二郎先生著
工業算術書
 ◎◎洋裝菊判全一冊
 正價金六十錢

弘道館出版書目

廣島高等師範學校教諭 藤井慮逸先生著
新尋常小學地理教授書
 五年用 ◎◎正價金六十五錢
 全一冊 ◎送料金八錢

京都帝國大學 西田幾多郎先生著
善の研究
 ◎◎洋裝菊判上製全一冊
 正價金壹圓

文學博士 遠藤隆吉先生著
東洋倫理研究
 ◎◎洋裝菊判上製全一冊
 正價金壹圓

帝國教育會編輯 (定期刊行雜誌)
帝國教育
 ◎◎每月一回一日發行
 ◎一冊定價金貳拾錢

東京帝國大學文科大學哲學會編纂 (定期刊行雜誌)
哲學雜誌
 ◎◎每月一回十日發行
 ◎一冊定價金十七錢

弘道館新書目

三重縣師範學校編纂
 基本的**實驗各科教授法真髓**
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金 貳 圓

京都帝國大學法科大學教授 法學博士 神戸正雄先生著
日本經濟政策論
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金 貳 圓

京都帝國大學理工科大學教授 工學博士 金子登先生著
水 力
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金 壹 圓

京都帝國大學理工科大學助教 理學士 比企忠先生著
日本產礦物各論
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金 八 拾 錢

東北帝國大學理科大学教授 理學博士 林鶴一先生著
初等幾何學の形體
 ◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金 八 拾 錢

弘道館出版書目

中等教科研究會編 (文部省檢定濟)
 統合主義 **國文法教科書**
 ◎和裝全 四 冊
 正價金 六 拾 五 錢

中等教科研究會編 (文部省檢定濟)
平面三角法教科書
 ◎洋裝四六判一冊
 ◎正價金 三 拾 三 錢

文學博士關根正直先生校 文部省實業學務局 宇野三郎先生著
明治女子實業讀本
 ◎洋裝全 四 冊
 ◎正價各冊 金 廿 五 錢

早稻田大學講師 樋口蘭林先生著
少女衛生打明け話
 ◎洋裝四六判美本一冊
 ◎正價金 三 拾 錢

弘道館出版書目

京都文科大學教授文學博士 內藤虎次郎先生述
清朝衰亡論

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價金六拾錢

京都醫科大學教授醫學博士 松浦有志太郎先生述
花柳病講話

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價金九拾錢

東京高等工業學校教授米國工學士 關口八重吉先生著
工作機械

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價金貳圓八拾錢

東京文科大學講師文學士 松浦一先生著
トルストイの藝術觀

◎洋裝四六判上製
◎正價金六拾錢

弘道館出版書目

東京理科大學教授理學博士 長岡半太郎先生述
現今の電氣學

◎袖珍全一冊
◎正價金拾貳錢

京都法科大學教授法學博士 毛戶勝元先生述
株式會社の話

◎袖珍全一冊
◎正價金拾貳錢

京都醫科大學教授醫學博士 藤浪鑑先生述
疾病の原因

内容通俗病理學の必要○疾病概論○疾病の原因並之に對する手段

◎袖珍全一冊
◎正價金拾貳錢

京都醫科大學教授醫學博士 和辻春次先生述
音樂才能と遺傳

◎袖珍全一冊
◎正價金拾貳錢

弘道館出版書目

京都法科大学教授法學博士 中島玉吉先生述
通俗學 藝文庫 **家督相續の話**

◎袖珍全一冊
 ◎正價金拾貳錢

京都法科大学教授法學博士 神戸正雄先生述
通俗學 藝文庫 **放資の話**

◎袖珍全一冊
 ◎正價金拾貳錢

京都理科大学教授理學博士 松井元興先生述
通俗學 藝文庫 **立體化學**

◎袖珍全一冊
 ◎正價金拾貳錢

前京都帝國大學總長男爵 菊地大麓先生述
通俗學 藝文庫 **米國所觀**

◎袖珍全一冊
 ◎正價金拾貳錢

弘道館出版書目

文學士 高桑駒吉先生著
參考 **日本れきし**

◎洋裝菊判形全一冊
 ◎正價金壹圓五拾錢

文學士 高桑駒吉先生著
參考 **東洋れきし**

◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金壹圓貳拾錢

文學士 高桑駒吉先生著
參考 **西洋れきし**

◎洋裝菊判上製全一冊
 ◎正價金壹圓

梅園會編纂
梅園全集

◎洋裝菊判上製全二冊
 ◎正價金七圓

三浦梅園先生の遺著三十餘種悉く本全集に現る―何れも經世、經國、利用、厚生の資たらしめるはなし三浦梅園先生は寔に一世の大儒にして大經世家也

上 5L 10

弘道館出版書目

茨城縣女子師範學校附屬主事 澤 正先生著

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價 金 壹圓

◎本書は學校實質の唯一の改良新案である。學校教育の基礎は學級經營にあり

文學博士 吉田熊次先生序 岡山縣師範學校附屬小學校編纂

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價 金 壹圓貳拾錢

定國 修身教授資料

早稻田大學講師 樋口勘治郎先生著

少年衛生 打明け話

◎洋裝四六判形上製一冊
◎正價 金 參拾錢

◎著者は世の父兄教師にかわつて春氣發動機時代の少年の爲めに衛生法を教育的に説いた

文學博士 中島力造先生校閱 文學士 岩橋 遵成先生 文學士 豐島要三郎先生 共編

實日踐倫理學

◎洋裝菊判上製全一冊
◎正價 金 壹圓五拾錢

終

